様式第3号(第12条関係)

審議会等の会議の記録

会議の名称	第２回伊勢崎市立学校の適正規模等に関する基本方針検討委員会
開催日時	令和８年９月１７日（木）午後１時３０分～午後３時００分
開催場所	伊勢崎市役所北館４階会議室
出席者氏名	【委員　１１人】 青木委員長、関副委員長、小林委員、松村委員、諏佐委員、 巽委員、田部井委員、三木委員、眞下委員、齊藤久枝委員、 皆瀬委員 【事務局　７人】 二上教育部長、髙橋教育部副部長 教育部総務課　大平課長、阿左美総務係長、青木総務係長 学校教育課　　神立課長、赤岩学校支援係長
傍聴人数	０人
会議の議題	１　開会 ２　議事 ⑴ 望ましい教育環境と学校の適正規模について ３　その他 ４　閉会
会議資料の内容	・次第 ・第２回検討委員会説明資料
会議における議事の経過及び発言の要旨	１　開会 ２　議事 ⑴ 望ましい教育環境と学校の適正規模について 事務局より、資料に基づき、国の手引きと伊勢崎市の比較、学校を取り巻く環境の変化、検討の際に考慮すべき事項、小規模校のメリット・デメリット、大規模校のメリット・デメリット、本日の議論ポイント及び教育長から委員に伝えたいこと等について説明があった。 議論に当たっては、広域化、総合化、現代化の視点から、子どもにどのような学び、教育環境を保障するかを起点とし、望ましい学校規模を考えることが重要との認識を示し、学級数だけでなく、１学級当たりの児童生徒数、学校全体の児童生徒数、将来推計を含めて学校規模を考える必要があることを確認した。 **議論１　子どもに特に保障したい教育環境とは何か** （事務局からの例示） ● **多様な他者と出会い、考えを広げられること**

	● **対話や協働を通して、学びを深められること** ● **一人ひとりの状況に応じた丁寧な指導を受けられること** ● **多様な専門性を持つ教職員が組織として子どもを支えられること** ● **地域社会との関わりがあること** （委員からの意見・感想等　順不同） ● **教職員の専門性** ・小規模校では、中学校で教科の専門教員が不足し、専門外の教科を担当する場合があり、専門性の確保という点では大規模の方が望ましい。 ・中学校では専門性を持った教員がきちんと揃って指導できる状況にあることが必要。 ・教員数がある程度確保されることで、同じ教科の教員から指導方法を学んだり、生徒指導について学び合ったりする機会が増えるなど、教員自身の学びにつながる。教員の質が高まらないと良い教育環境は保障できない。 ・学校規模が小さい場合、教職員間の人間関係が固定化し、集団に入りにくい教員が生じる可能性がある。教員も子どもと同じで、たくさんの人がいる方が成長できる。 ● **地域との関わり、子どもの居場所** ・若者の居場所づくりの事例として、安心して過ごせる場を起点に、子どものやりたい気持ちと意欲を大人が伴走して実現し、地域や企業を巻き込んだ活動につなげている取組が紹介された。地域社会との関わりは、若者の成長にとって非常に重要である。 ・公民館と学校をつなぎ、地域の大人との交流を通じて子どもが自分のやりたいことを見つける取組が紹介された。安心して楽しく過ごせる環境を整えることが子どもの意欲につながり、そのためには地域との関わりがとても重要である。 ・地域性を大切にする一方、地域意識が強すぎると他地域との交流を妨げる可能性もあるため、学校間、地域間の交流を広げていくことが必要である。 ・挨拶運動などを通じた地域住民との交流も、子どもたちの成長の支えとなる。先生や地域の人との交流を深めることが、地域を支える人材につながる。 ・他市ではＰＴＡ廃止の話もあり、学校と親とのつながりが減っているのは寂しい。この流れを止めるのは難しいかもしれないが、地域でも子どもたちが健やかに成長できるよう応援したい。 ● **職場体験、キャリア教育**

・中学生の職場体験は、実際の仕事や社会に触れることで、将来の職業や進路を考えるきっかけになるため、より多様な体験機会を設けてほしい。

・職場体験で得た学びを生徒同士が共有することで、体験がさらに深まる。そのためには一定数の生徒の体験が集まることが有効であり、少ないと学びが深まらない可能性がある。

・職場体験や大学のオープンキャンパス等を通じて、早い段階から社会や将来を知る機会を増やすことが、子どもの自立や将来の目標につながる。

● **多様な人間関係**

・市内の公立幼稚園では全園が単学級となっており、クラス替えができないため、３年間同じ人間関係の中で過ごすことになる。少人数ならではの絆や良さがある一方、多様な他者と出会い、交友関係を広げる機会という点では、ある程度の学級数が必要だと思う。

・外国籍児童生徒などへの対応では、教員による支援だけでなく、児童生徒同士が関わり合い、日本語や互いの文化を学ぶなど、子ども同士の関係から生まれる多様性の良さがある。

・色々な子どもたちがいることで、多様な考え方に触れたり、クラス替えや様々な集団をつくったりする機会が確保しやすい。

● **安心して学べる環境**

・学校は子どもたちが安心して通える場、学べる場であることが大切。その面から考えると、子ども一人ひとりの状況に応じた丁寧な支援と、多様な専門性を持つ教職員が組織として子どもを支えることは特に重要であり、ある程度の規模の学級数が望ましい。

・幼稚園や小学校の低学年、外国籍の児童や特別な支援が必要な子どもにとっては、一人ひとりの状況に応じた丁寧な指導が必要。

● **その他**

・今後、統合等によって通学距離が長くなる場合には、スクールバス等の通学手段についても併せて検討する必要がある。

<u>議論２　教育環境を実現するために、どのような学校規模が望ましいか</u>

（４つの視点）

● 学級数　…クラス替えや教員配置
● １学級当たりの児童生徒数　…多様な意見や考え方
● 学校全体の児童生徒数　…学校行事や部活動、委員会活動
● 将来推計　…10年先を見据え

	（委員からの意見・感想等　順不同） ・中学校では生徒数の減少により、学校単位で部活動を維持することが難しくなり、複数校での合同部活動がある。また、少年野球等の地域クラブも、学校単位ではなく地域全体で活動するケースが増えている。 ・部活動の地域展開では、教育委員会だけでは対応できず、地域との連携が不可欠である。 ・部活動の地域展開について、教員の負担軽減だけを進めるのではなく、地域側の受け皿や指導者、予算、マンパワーの質の確保が必要になる。 ・部活動から離れた子どもの居場所がなくなることで、地域の見守りが届きにくくなる可能性があり、放課後の居場所を地域でも支える体制が用意できるとよい。 ・学校行事はある程度の数がいないと盛り上がらない。 ・児童生徒数が減少すると運動会などで複数の団を編成することが難しくなるなど、学校行事の在り方にも影響する。３つの団編成ができるくらいの規模がよい。 ・小規模校でもそれを逆手にとって、小規模でしかできないことを工夫でき、課題を軽減する方策はとれる。 <u>次回に向けた提案</u> ・今後、より具体的な検討を進めるため、現在または過去に学校長を務めた専門家を招き、小規模校等で実際にどのような工夫を行ったか、また本当は行いたかったができなかったことなどについて話を聞く機会を設けることが提案され、了承された。 ３　その他 次回検討委員会　11月19日を予定 ４　閉会